

かけのようなのを履いていた。

昭和二十一年三月、召集兵はほとんど寒さと食事で、飯上げに行つて来たら死んでいた。

昭和二十二年の春よりソ連兵の警備がつかなくて自由に出勤。二十二年、二十三年の春のタンポポは皆摘んで食べていた。日曜日は食堂で共産主義の話。演劇をしていた。私はやめた。工場の中でも寒くて大きなファンが回っているのに毛糸手袋、軍手、大手（ダイテ）と、外とうを着て仕事をしていた。

ロスケのマダムと物々交換をしている時、戦友がダモイらしいという話をしていた。

ダモイの日までれんが工場の使役をしていた。

ダモイ列車途中、半年前に帰つたはずの戦友が道路工事をしていた。ナホトカに着いて第三收容所に入って寝台の順番を決めていたら、すぐに第二收容所に入り、一晩泊まった次の日は第一收容所に入った。ここに入ると使役はないとの事。

一週間程で引揚船が来た。皆甲板に上り日本の旗を見ていた。一番感激したのは舞鶴港の山を見たとき最

高でした。

十八日ナホトカ到着、二十五日ナホトカ出帆、二十日八日舞鶴上陸、昭和二十三年八月三十一日帰宅。

## シベリア抑留前後の記

滋賀県 堀 栄次郎

### 兵歴の概略

生年月日 大正三（一九一四）年十二月十九日

出生地 滋賀県彦根市

召集入隊 昭和十九年八月二十三日 福井県敦賀市中

部第三六部隊

昭和十九年九月二日 満州琿瑯第六一

二部隊第一中隊

松沢隊

転属 昭和十九年十二月 満州綏化第四四

九〇部隊舟木隊

原隊復帰 昭和二十年七月 第六一二部隊

旅団編成 昭和二十年七月

満州独立混成第

一三五旅団

独立歩兵第七九

六大隊第四中

隊、通称・不朽

第三七五六四部

隊（旧隊・歩兵

第八中隊森隊）

二站陣地 森隊

少尉森久作隊

二站陣地 武装

解除、孫呉集

結、出発

作業隊編成孫呉

にて第十九大隊

村上隊

入ッから 昭和二十年九月十六日

抑留まで

「ダモイ」が、

北方「シベリ

ア」行きに方向

満州（黒河）へ逆送

昭和二十一年四月三日

「ダモイ日

本」満州国経

由にて帰国の

予定

昭和二十一年四月七日

第二梯団編成

南下出発 十

九日北安到着

北安南下出発

葫蘆島にて乗

船

引揚げ 昭和二十一年九月十六日

帰船 昭和二十一年十月十七日

昭和二十一年十月二十三日

博多港上陸

復員 昭和二十一年十月二十五日

復員、自宅へ

着く。家族全

員無事であつ

た

日ソ開戦と兵營の一日

昭和二十年八月九日（快晴）朝、私は第六一二部隊歩兵隊梁家屯に陣地より帰營中、衛兵下番にて初年兵五人引率し現地自活（畑仕事）に外出するとき、在隊兵隊たちが北鎮台方向を直視、その上空を旋回している飛行機を発見した。直感して日本の飛行機ではないぞ、変な気持ちで情勢を眺めていた。まさかソ連機ではないのかと周囲の兵隊も見ていた。不思議に思いつながら、表門衛兵所で申告し、何事もなく營外へ出た。畑仕事を終えて昼食のため帰營、營内のただごとでない状態を察知した。

「日ソ開戦」だ。在隊兵は既に陣地へ出発したあとである。今すぐ軍装支給受け後続出発する、待機せよとの命令を受けた。二站陣地へ（距離約四〇キロ）夜中軍装備して、徒歩強行軍であれば体力的厳しさを早くも同一行動を心配した。夕方になり出発命令あり、幸運にも「木炭トラック」の配車により陣地に向け出

発することができた。トラックも擬装戦闘態勢で、いよいよ戦争がと再確認し「ソ連と対戦」入隊後毎日訓練、肉攻による教育を受けたことが、実行の時期が来たのである。

二站陣地

この日を予測し、二站到陣地を作るべく部隊の大半の兵を陣地構築に集中、天幕生活しながら従事していた。突然の開戦で主力となる二站陣地の構築が未完成で遅きに失した。二站で命令を受けた兵は、帰營することなく戦闘配備につき、私物は原隊に残されたままである。

陣地へ行く途中、国境黒竜江方面沿岸一帯は早くも火の手が上がり、夜空を赤く染めている。最前線の江岸監視哨も少数兵にて小銃程度で対戦、対抗できるのか、あるいは撤退するのだろうか……。

陣地に夜中到着、森隊に配備された。ソ連が電撃作戦なら、国境黒竜江からは（五〇キロ）この二站までいつ頃が交戦なるか。二站陣地の中央道路を通るのは間違いない。今日まで肉攻戦教育訓練受けたが、初体

験で無駄死にはしたくない。十キロ爆薬を抱いて体当たり、玉砕でなく一発勝負である。充分の武器補給も得られず、環瑛から十榴一門が搬入されたようだが、敵は機甲部隊を先頭に続々と向かって来る。

何日目か、ソ連が侵攻、夜に入って「ブスーブスー」と銃弾が頭をかすめた。いよいよ交戦なりや、どうすればよいのかタコ壺にいては連絡がとれず、でも命令を待つしかない。敵は自動小銃だ。マンドリンという軽機関銃に匹敵する最新兵器と聞く。こちらは三八一九式単発小銃では到底及ばない。

朝から中央道路をソ連の重戦車（女兵も乗っている）が列を組んで通る。山の上から手をこまねいて自重している。陣地内を容易に突破、我が隊古兵の上等兵は平気で出動して行くのを確認した。いったん命令あれば絶対服従、玉砕を覚悟していたのでなかったのか。夕方頃になれば朝南下した戦車群が嫩江（ニホコウ）から帰って来るが、おとなしく通過だ。指をくわえていたときもある。暗夜の歩哨で雨が降った時は、小銃を構え一心に立って見張りしている。敵が近づいて来たのでは

ないか黒い影が見える、ヒヤリとする。朝になってみると雑木を見違えたのであった。雨の夜の朝は、歩哨中に「菊花の御紋章」銃が錆びてくるのが一番つらい。小銃の敵しい手入れ整備ができず、間がないので一番心配した。

十五日の朝は、七曲、徒溝子を敵戦車が左右に銃撃を加えながら入って来たようである。その夜は攻防戦が朝まで続き、戦死、負傷者が幾人か出たようであった。

十六日、晴。十七日、曇。敵は戦車壕を超えてジリジリと陣地に迫っている。飯島中隊長は、常に先頭に立ち、最前線で指揮を続けられたが、敵の射撃が集中し、ここで倒れ、全滅をした。多数戦死、負傷兵も多数あったと聞く。

#### 白旗を掲げた軍使

十九日、環瑛第一三五旅団の電話不可能となって「陸の孤島」と孤立無縁であった。

二站陣地隊長の長島少佐のもとへ軍使が派遣され「十五日、天皇の詔書が発せられ、各戦線と停戦に応

じるよう……」。孫呉では十五日の玉音放送を聞かれ  
ても、前線では聞く連絡もなく、第一回軍使内田中尉  
が来て、長島少佐と対座、停戦の報に少佐は怒り「日  
本軍人ならばこのような恥ずかしい役目をもって来れ  
るものか」云々。軍使として来た中尉は、「情けない  
……任務が終わったら……」。中尉は、外へ出て一、  
二分もしない間に「手榴弾で自決」したのであった。  
軍使をスパイだと思われた。

八月二十日（快晴）第二回目。昼頃、孫呉に河原崎  
中尉来る（滋賀県神崎郡能登川町出身）。

松沢大隊長は金元軍曹他に兵隊二人にて、地区司令  
官の長島少佐のところへ護送した。軍使は、停戦のこ  
と、昨日の軍使のことを申し出、ぜひ停戦に応じて下  
さいと懇願した。長島少佐は「瓊瑠北鎮台はどうなっ  
ているのだ。浜田閣下からは何も報せがない。我輩は  
軍司令官が旅団司令官の命令しか聞かない」また「貴  
様のような若僧ではなく、もっと責任ある人が来るべ  
きだ。明朝八時までには参謀か我輩の知っている誰かを  
使いとして立てよ、それまでは戦闘を一時中止する、

帰ってそう言え」。

八月二十一日、第三回目軍使、ジープに乗って来  
た。ソ連側三人と森少佐、昨日の河原崎中尉。

長島少佐も、黒上見習士官の一行が帰陣し、師団長  
の言葉が伝達された。長島少佐は、デマや謀略でな  
く、真実であることを初めて知った。

ソ連側通訳が停戦の条件を出した。「武装解除、地  
雷の掘り上げ、将校と兵を別々にして集合せよ、そし  
てソ連軍の邪魔をするな」完全な無条件降伏となっ  
た。

その日の夕刻まで、全員武装解除、兵器類の集結。  
部隊長の終戦、今後の指示あり。夜に入り「ダモイ日  
本」孫呉へ徒歩出発したのである。

以上「二站への軍使」については後日、昭和六十二  
年八月二十日、歩兵八中隊戦友会福井大会、金元茂三  
氏の談話であります。

国境守備隊の我々に課せられた関東軍司令部「作戦  
考案」には次のごとく示された。

「主たる抵抗は国境地帯に於て行ない、これがため

兵力の重点は国境に置き、これら交戦部隊は、その地域内に於て玉碎せしめる」また、我々の四軍に対しては、「貴軍は玉碎的敢闘精神をもつて戦い仮令軍として統一作戦不能となるも遊撃戦を展開するなどし、もつて後方主力の作戦を容易ならしむる事に努むべし」でありました。

終戦―孫呉―黒河―ソ連ブラゴエ

昭和二十年八月二十一日、終戦。二站陣地。

武装解除を受け、夕方孫呉に向け徒歩出発。このとき暑中なのに新しい防寒服装一式が支給され着替えた。さては寒い「シベリア」か。兵器がなくなり「ダモイ東京」と帰国できる喜びで、リュックに食糧品、缶詰、甘味品と持てるだけ詰め込み出発した。戦闘中の疲れ、寝不足等でリュックの重さに困り、休憩時、歩行中にボチボチ重さを調整、大事な缶詰を捨てながら進んだ。途中に喉が渴き、暗がりの中、溜水を我先にと飲んだ。朝になり、どこも泥水を飲んだものだった。手持ちした消毒薬を飲んだおかげか下痢もしなかった。

ロシアの監視兵が、途中、休憩時、持ち物検査と言いながらマンドリンを突きつけ、腕時計、万年筆、皮革等強奪する。不良監視兵には驚いた。腕時計をいくつも両腕につけて、ネジを回すことも知らないのも、無理になぶり故障させている。ソ連兵の程度がわかる。すぐに歩きながら各兵へ強奪されないように注意伝達された。私物検査を悪用し、銃で脅かされるのである。

八月二十三日、孫呉到着。足の裏に豆ができて歩行困難、しばらくの間は寝ていた。数日してようやく快復した。とたんに使役に引き出される。捕虜の身分、しかたなし。

九月十六日、孫呉出発。ダモイ東京で出発したが、南下の方向が途中より北上、ナホトカ經由帰国するのだと、結局はシベリア送りか。第十九作業隊は野宿しながら黒河まで、黒龍江を渡河するため乗船待ちだった。そのとき急に天候が変わり、ものすごい降ひょうに遭った。私はこのひょうに打たれた痛さと寒さに我が人生の前途に不安を抱いた。

乗船し向岸のソ連領ブラゴエジチェンスクに着いた。ソ連の策略にまんまと連れ込まれたのであった。これから奥地へ連れられて行くのだろう。汽車待ちか、野宿生活が続いたと思ったころ、レンガ造りの窓は扉もない収容所へ入所することとなった。今後の行動が大仕事である。直ちに使役作業開始である。第一に収容所の周囲は有刺鉄線で嚴重である。ブラゴエジの毎日の作業が、満州国占領物資の荷揚げである。

朝は早く出発し船着場まで向かう。正門の所で整列点呼、人員の確認。一〇〇人くらいの作業班一〇列縦隊に並び、アジン(1)、ドヴァ(2)、ツリー(3)と数えているが、途中また(1)から数え直す。人員の確認が大変な時間がかかり、寒い朝の日は付き添いのロシア人の頭の悪いことに皆が弱っていた。

ブラゴエ、黒河からの船着場が満州国を占領した。あらゆる占領物資、火事場泥棒そっちのけの強奪である。満州国にある何から何まで、日本兵は「ダバイ東京」と甘言にだまされ、追い回されながら、船からの食糧品(六〇キロ入り麻袋)を初め、重い荷揚げ仲仕と

して、毎日空腹に耐えて、初めは反抗的であり、重さに耐えられず要領よくまわっていたが、サボってれば終了時刻が遅れ、ノルマが達するまで帰ることができず、仕方なく協力、まじめにロシア人の指示に従うことにした。私達も空腹満たすためこっそりと食料となる米、豆、塩など持ち帰った。次第に監視兵に見つかりながらも要領よく持ち帰り、収容所のストープを利用し皆に分けながら日々を過ごした。

時には軍の工場への使役もあり、工場には不思議と若い男の姿を見ない。守衛も女子であった。既に女子でも日本軍人が着用していた軍服を着ており(終戦の時、帰国するということで新しい防寒服を支給されたことを思い出し、先刻入ソのとき、検査を利用して、着て来た服を取り上げ、古い服にかえられた。ソ連も計画的で如才ないと感服した)、靴も新しく、また缶詰はU・S・Aの印刷。黒龍江凍結後は十輪車の軍用トラックにて物資が運ばれ、いかにアメリカが後押ししていたかと思つた。

年末に入るころ、寒さ厳しく、荷揚げ作業も見通し

がつき、後は農場の手伝い、工場の使役。そのころ栄養失調、発疹チフスが発生した。二月初旬ころには収容所も隔離された。中央病院とかに変名されたように思う。死亡者四〇〇人くらい出た様子であり、同室の山田教竜君（三重県出身）はお寺の住職であったので、亡くなった戦友を毎晩お通夜に出向き、お経をあげて霊を弔っていたのを思い出す。彼とは満州、逆送第二梯団で南下「小興安」の所で彼と別れた。第三梯団に加わり南下してくれることを期待していたが、北安在留中にも彼の姿を見ることができなかった。帰国後、留守宅を訪問、その旨伝言したが、ご家族の心配が胸に詰まった。

私も、三月初め頃に赤痢にかかり重病者となった。それから記憶なく戦友にお世話になり、三月末ようやく快復し感謝している。

ブラゴエ生活も、ロシア人の監視のもと「ダモイ東京」との甘言を正直に受け止め、来る日も来る日も「ダバイダバイ」と荷揚げ作業の使役に引きずり回され苦勞し、極寒のシベリアに一冬過ごした。ソ連抑留

八カ月、ようやくブラゴエ十八収容所最終の逆送者として、シベリア捕虜生活に終止符を打った。

満州国へ（逆送）黒竜江を渡る

昭和二十一年四月三日、満州国の土を再び踏むことはないと心に思っていたのに……。ブラゴエ第十八収容所（中央病院）から、重病者のみ残し、黒河に向かった。黒竜江はそのころ解け始めており、ところどころ薄氷で、渡河するのも危険個所を避けて渡った。私達が最後の逆送であった。

満州国へ再び 第二梯団南下

昭和二十一年四月三日、黒河に到着、江岸収容所（元警察学校）に入る。黒河には既にブラゴエから逆送された病氣快復者等、多数の戦友に再び会うことができ心強く、故国日本へ何としても帰りたい気持ちでいっぱいだった。

黒河から南下のニュースを耳にした。去る三月二十九日、既に第一梯団八一六人が南下していた。近く第二梯団の編成があると、その中に加わること念願、期待した。四月六日、運よく第二梯団編成に加えられる



た。出発は四月七日、意外に早く帰国に近づくことで嬉しかった。

第二梯団長竹内某、総人員一四三五人、主として病院患者、病弱者、一般邦人、体力なき中年者等、数台のマーチョ（馬車）に分乗、他は徒歩。警備兵（八路軍）数人付添い。

この日残留者となった第三梯団予定者が後日「黒河事件」に巻き込まれ、多数の死者が出て予期せぬ悲惨な出来事が起きたのである。私が残留になっていたら、病後未快復で到底脱出に加わることができず、銃殺されていたと思う。日ソ戦争中なれば兵隊は皆国に捧げた命、惜しくはなかっただろうが、せつかく生き延びた大切な命を「黒河事件」に奪われた多数の戦友、ソ連抑留中は苦勞し、ようやく黒河まで生きて来られたのに、帰国を一心に願っていたやさき、この事件に犠牲者になった憤死者の心中お察しいたします。大方名前もわからず、死亡を確認することもなく、最期となられたと思う。ただただ御冥福をお祈りするばかりである。

南下の途中、小興安での一夜の出来事である。当日の宿泊地は、小高い丘の所で各所に木炭が多く野積みされていた。その夜は二〇人ほどの泊まり小屋が見つかり、北満の夜は冷え込み、今晩は炭が豊富で久しぶりに暖かく寝られると、ふんだんに炭火で暖を取り休んだ。それが幸いか、不幸か、夜中「みんな、起きよ、危ない」と誰かが叫ぶ声に目を覚ました。とたんに天井が落下、家が倒れてきた。幸いに天井と下地に少々の空間があったが、寝る前に炭火で暖をとったのが、まだ目前で燃えている。全くの生き地獄であった。炭火の明かりだけで四囲がわからない。これで一生の終わりかと観念したとき、出入り口の方から、先に逃げ出した人が「こちらへ出て来い」と皆を誘導してくれた。そのため幸い外に出る事ができて、またも九死に一生を得たのであった。外は夜明けの残月が淡く辺りを覆っていた。満人の家屋は主に土で造られており、暖房で建物が緩み倒壊したものと思う。すぐに火が回らなかったのが何より幸いであった。朝になって予定通り出発する。私は家屋の下敷きになって体が

少々傷み困っていた。引率者の配慮で、今日は馬車に乗せてもらうことになり助かった。出発後、隣で寝ていた軍曹らしい人が棟木の下敷きとなり死亡されたと聞き、この事情がどうして留守宅家族に伝えられるだろうかと思った。名前もわからず行方不明のままにされるだろうと思うと、誠に申し訳なく残念に思いません。ご冥福を心からお祈り申し上げます。

#### 引揚げ―帰国

昭和二十一年九月十六日、北安にて日本人引揚げが定まり出発する。健康体組が一日早く出発されたが、途中、緩化駅より鶴岡炭鉱へ回され、七年間以上も帰国が遅れ、多数の死亡者もあったようである。

九月三十日、錦州駅に着いてから、半月間乗船待ちし、十月十七日ようやく出発した。葫蘆島着、待ちに待った「ダモイ」の日が来た。過ぎ去った軍隊生活、戦争、ソ連抑留、満州逆送を思い出した。

葫蘆島を最後に母国日本へ向かった。この船の船員の、郷里彦根市出身の平塚六雄氏に出会った。初対面であったが戦後日本の状況を聞かせていただいた。こ

の船は間違ひなく博多に入港し日本上陸だから安心するよう、ここで初めて真実の言葉に触れたのである。

十月二十三日上陸、復員手続きを終わる。

昭和二十一年十月二十五日、帰宅する。家族、母、妻、長男、全員無事であった。

おわりに

ソ連との開戦、二站陣地に爆雷を背負って敵戦車に体当たりし爆破した勇士、終戦を知らず。肉攻戦に生命を捧げた戦友、帰国を前にして亡くなった無名の方々、戦友のご冥福を心からお祈り申し上げます。

平成十二年八月十五日 五十五年目の終戦の日 記

## 所 感

京都府 毛 呂 嘉 一

私の出生地は網野町で、大正五（一九一六）年生まれで、十一年兵である。私の学歴は小学校の高卒であるが、歳をとってから大学入試資格をとり、その後近